

リビング・ウィルについて

介護がはじまりそうだと思う時点で、離れて住んでいてもご家族が集まり、これからどうするかはもちろん、終末期医療についての事前指定書(リビング・ウィル)についても話し合いの機会をつくってはほしいと思っています。

例えば、「最近、お母さん(お父さん)の様子がおかしい。もしかするとこれから介護が必要になるかもしれない」「その時になってからだと正しい判断ができないかもしれないので、今のうちに話し合いをしておきたい」「これまで親の事について兄弟姉妹が話し合う機会がなかったが、これからはよく話し合って決めていこう」などと、子供達が一堂に会して話し合いの場をもつのです。また、その際には以下のようになるべく具体的な方針についても決めておくこと、その後の介護がスムーズにいけます。

『リビング・ウィル』=死に至るまでの医療の選択
「治療の事前指定書」として希望の有無の意思表示をしておく項目

- ・栄養補給の方法…胃ろう等
- ・人工呼吸器の装着
- ・心肺蘇生

本人、家族全員の署名を。

生きるとは何か、というところまで関わる大きな問題です。ですから、親の行く末について話し合う事で子供達は自分達の人生についても多くを学び、準備をする事になります。

医療が発達する前は、死に方についての合意がごく自然に「当たり前」の事として行われていたと考えられます。ところが現代ではまるで私達には永遠の命があるかのような錯覚が生じてしまったようです。しかし、どんなに医療が進歩しても、私達はすべて死ぬ存在。それを前向きに受けとめるためには、まず私達の先を歩む親の世代の最期について、真摯に語り合う必要があるのではないのでしょうか。

介護とは人生と向き合うこと

ある施設でこんな事があったそうです。

ご家族との面談の際、高齢になってからの自然な嚥下障害では胃に穴をあけて栄養を与えても無理な延命をするだけなので、勧められないと話したそうです。それまで、自宅で献身的に介護されていた3人のお子さん達のうち長男と長女は同意されたのですが、末っ子の次男だけはうっむいておられます。末っ子という事で溺愛されて育てられたのでしょうか。お母様にはたとえどんな状態になっても生きてほしいと思われたようです。

これまでこのお子さん達は家で寝たきりのお母様を必死で介護してこられた。それだけ一所懸命にやっていたお子さん達だからこそ、考えていただきたいと思いついて話し合いをしました。

ご家族の皆さんに「生きるとは何なのか」を時間をかけて考えていただきたいのです。お子さん達にとっても、自分や親の人生と真剣に向き合わざるを得ない問いですから、簡単には答えが出ないかもしれませんが、それでいいのです。人間ですから、親の死がまるで自分の考えで決まるように感じれば、親が死ぬという選択肢をとりたくないのは当たり前です。

そのためか施設に切羽詰ってから入所相談に来られるご家族にはこの話し合いが全くできていない事が多い事に驚かされます。挙句、意見がまとまらず、「じゃあ、もう先生の言うとおりで良いです」となってしまふ。施設に来るまでには話し合いをする時間は年単位であったはずですが、それがその間は、親の変調を「見なかった事にしよう」とでもいうように、皆がそばを向いてしまっている場合が本当に多い。もったいない事です。

親の最期というのは、親が生命を与えてくれた、子供達の人生の中で最大の転換点です。かけたものの大きさを考えると、もっと子供達は真剣にこの問いに立ち向かうべきでしょう。

ある日、入所の相談に来られた50歳代の娘さんが突然泣きだされました。「私はずっと親に愛されてこなかった」と言うのです。お母様の入所の相談のはずが、娘さんのカウンセリングの場になってしまいました。目に涙をためて訴えているその娘さんが、抱きしめてあげたいくらいの小さな小学生ぐらいの女の子に見えたそうです。

介護とは、家族の人間関係の長きにわたる積み重ねがそれほどあらわになるものなのです。親の介護問題で悩む時、必ずあらわれると言っている、この小さな子供のような自分を抱きしめてあげて下さい。「お母さんは本当はあなたの事が大好きだったのよ」と。「いや違う。姉さんにえこひいきしてばかりだった。」もし、本当にそうだったとしたら、体の動かなくなってお母様は心の中で「ごめんね、優しくしてやれなくて」と謝っておられますよ。それを信じてもいいのではないのでしょうか。もう決着はついている。体の動かなくなると親は疎むべき存在ではなく、守るべき存在なのです。